

立正大学博物館年報

1

平成14 (2002) 年度

立正大学博物館

序

平成14（2002）年4月1日に開館した立正大学博物館の年度事業報告などを収めた『立正大学博物館年報』が刊行されることになった。

本年度は、とくに開館の年であるため「開館の経緯」「開館記念式典」「館の概要」「開館関係資料」及び「事業報告」「寄贈図書目録」などを収録することにした。

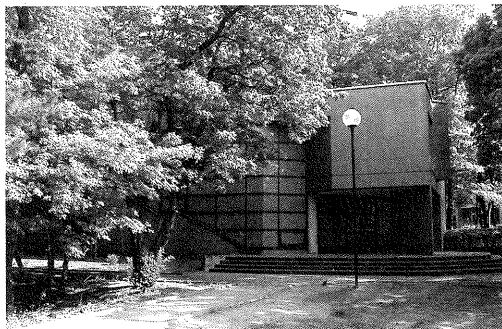
本館では、年度ごとの活動報告として『立正大学博物館年報』、情報誌『立正大学博物館報—万吉だより—』を刊行するほか、『館蔵資料基礎文献叢刊』シリーズを逐次刊行することになっている。また「企画展」「特別展」「公開講演会」などを開催し、地域の人びとに親しまれる開かれた博物館、学問的な薫り豊かな博物館、そして立正大学の学生諸君の勉学と教養の場としての博物館、加えて高校生・中学生・小学生が足を運ぶ楽しい博物館、と欲張った構想を練りながら歩んでいきたい。各位のご指導とご協力を願って止まない。

平成15(2003)年3月

館長 坂詰秀一

序

I. 開館の経緯 (1)	(7) 調査研究
(1) 設立の趣旨	(8) 教育普及
(2) 開館の道程	IV. 日誌抄 (20)
(3) 開館記念式典	V. 寄贈図書目録 (27)
II. 博物館の概要 (3)	VI. 資 料 (34)
(1) 組織と職員	
(2) 立正大学組織表	
(3) 立正大学博物館規程	
(4) 立正大学博物館細則	
(5) 施 設	
III. 事業報告 (10)	
(1) 運営委員会	
(2) 平成14年度収支計算書	
(3) 開館日数・入館者数	
(4) 出 版	
(5) 展 示	
(6) 収集・保存	



博 物 館

I. 開館の経緯

(1) 設立の趣旨

立正大学創立130周年記念として開設された立正大学博物館は、昭和7(1932)年に設置された立正大学考古学資料室、昭和53(1978)年に熊谷キャンパスに設置された考古学陳列室を母体として、大崎キャンパスの考古学研究室の所蔵品を加えて、構成されている。

(2) 開館の道程

平成14(2002)年4月1日、立正大学博物館が熊谷キャンパスに開設された。想えば、この日を迎えるまで長い歳月が経過していた。本学に考古学の研究が芽生えたのは、昭和初めの頃であるが、昭和7(1932)年に本田茂一・桃井秀治・矢追隆家の三氏と久保常晴先生が協力して、考古学標本室が設けられた。当時、本田氏は史学科の助手として勤務されていたのが幸いしたようである。

同じ年、立正大学考古学会の機関誌『銅鐸』の創刊号が発行された。この昭和7(1932)年こそ名実ともに立正大学において考古学が学内的に市民権を得た時であった。当時の標本室(後に資料室と改称)には、久ヶ原遺跡出土の弥生式土器をはじめ、原田淑人先生寄贈の俑・中国銭・玉斧・鏡、石田茂作先生寄贈の古瓦・瓦経のほか、埼玉県川田谷古墳の出土品などが並べられていたと云う。標本室は、その後太平洋戦争の激化によって閉じられたままであったが、昭和20(1945)年5月の空襲によって焼けた近所の人達が辛うじて焼け残った大学の本館(旧1号館)に避難したため、全教室を開放して対応したので、資料室にも人が溢れたと伝えられている。そのため、貴重な資料の多くが散逸したのは誠に残念なことであったが、ただ幸いに"瓦礫"の類は難を免れ、戦後に教材として活用されたのである。

現在、本学に寄贈された吉田格・撫石庵コレクションなど、考古学資料を主とする陳列品を主とするが、近い将来、自然科学分野の資料なども随時加えて展観に供することになっている。研究と教育(博物館学)の場として、また「特別展示会」など、地域に広く開かれた博物館として、運営を果たしていきたいと思っている。

昭和20(1945)年8月以降の混乱期は、立正大学そのものが安寧ではなく、何回か廃学直前にまでいったが、ときどきの教職員とそれを支えた人達の協力によって回避され、その後の躍進となった。そして、昭和34(1959)年の新館(旧4号館)の竣工によって考古学資料室は新たな局面を迎え、2室が配分された。これは、当時の考古学が社会的にも注目され、それに伴って立正大学の考古学研究が次第に知られるようになってきたことの反映でもあった。その後、各地の発掘資料が山積みされるようになり、当時の教養課程研究棟の地下にかなり広いスペースの収蔵庫が設置された。

ついで、昭和42(1967)年に教養部が発足し、熊谷キャンパスが完成した。そこに文学部の教養課程の学生諸君が通学することになった。新しいキャンパスは、10万坪という広い土地であったが、そのなかに遺跡が存在していた。新しい建物を建築するためには埋蔵文化財の発掘調査が必要であり、よって、熊谷キャンパスの埋蔵文化財調査が「遺跡調査室」を設けて実施することになった。

発掘は現場担当者の採用によって、調査は順調に進んだ。その結果、出土品を学内外に公開する必要から、昭和53(1978)年4月に、熊谷キャンパスに「考古学陳列室」が設けられることになった。そして、キャンパス内出土品と同

時にネパールのティラウラコット遺跡出土品の陳列コーナーを設けた。

大崎キャンパスの考古学資料室と、熊谷キャンパスの考古学陳列室、この二つを合体して「立正大学考古学博物館」の設置が各方面から要望されたが、その実現はほとんど不可能であった。しかし、それは幸いにして実現の方向にむかって歩みだした。つい先年のことである。

以上のような歩みのなかで、「立正大学博物館」が開館した。この博物館については当初「考

古学博物館」としなくてよいのか、とのご意見も寄せられたが、立正大学には、考古学以外にも多くの資(史)料が収蔵されており、それは日常的に教育と研究に活用されているので、「立正大学の知的財産を内外に周知活用して頂くためにも、全学的な見地での博物館とすべきである」との結論に達した。それは、博物館は、本学にとって図書館とともにステータス・シンボルとして発展すべきである、という考えからであった。(坂詰)

(3) 開館記念式典

平成14(2002)年4月1日(月)、入学式の諸行事が滞りなく終了した午後4時30分より、ステラ1階食堂において、大学事務局副局長・堀越正利の司会進行により立正大学博物館開館記念式典が盛大に開催された。

はじめに立正大学学長吉田榮夫、次いで初代館長坂詰秀一より挨拶が述べられ、その後ご来賓の今村啓爾様(東京大学大学院人文社会系研究科教授)、柳田敏司様(埼玉県文化財保護審議会会長)、真鍋孝志様(日本古鐘研究会会長)よりご祝辞をいただいた。続いて立正大学学園常

任理事・立正大学副学長加藤吉則による乾杯の発声により祝宴に移った。祝宴に際して、同窓生の昭和46(1971)年文学部史学科卒業の藤田富士夫様(富山市教育委員会埋蔵文化財センター所長)、及び同54(1979)年文学部史学科卒業の浅野毅様(静岡市立登呂博物館学芸員・主事)よりそれぞれ祝辞をいただいた。

来賓・招待者など約100名が列席し、午後6時滞りなく終了した。

なお、式典にあたり、多数の生花と祝電を頂いた。



(2002. 4. 1)



(2002. 4. 1)

II. 博物館の概要

(1) 組織と職員

a. 職員

館長	坂詰秀一
専門職員	上野恵司
博物館員	田村佳道

b. 運営委員

第1号委員	坂詰秀一	(博物館長)
第2号委員	上野恵司	(専門職員)

第3号委員 清水千尋 (法学部長)

田口正己 (社会福祉学部長)

第4号委員 佐美光彦 (経済研究所長)

千歳壽一 (環境科学研究所長)

第5号委員 竹内 誠

(博物館関係学識経験者)

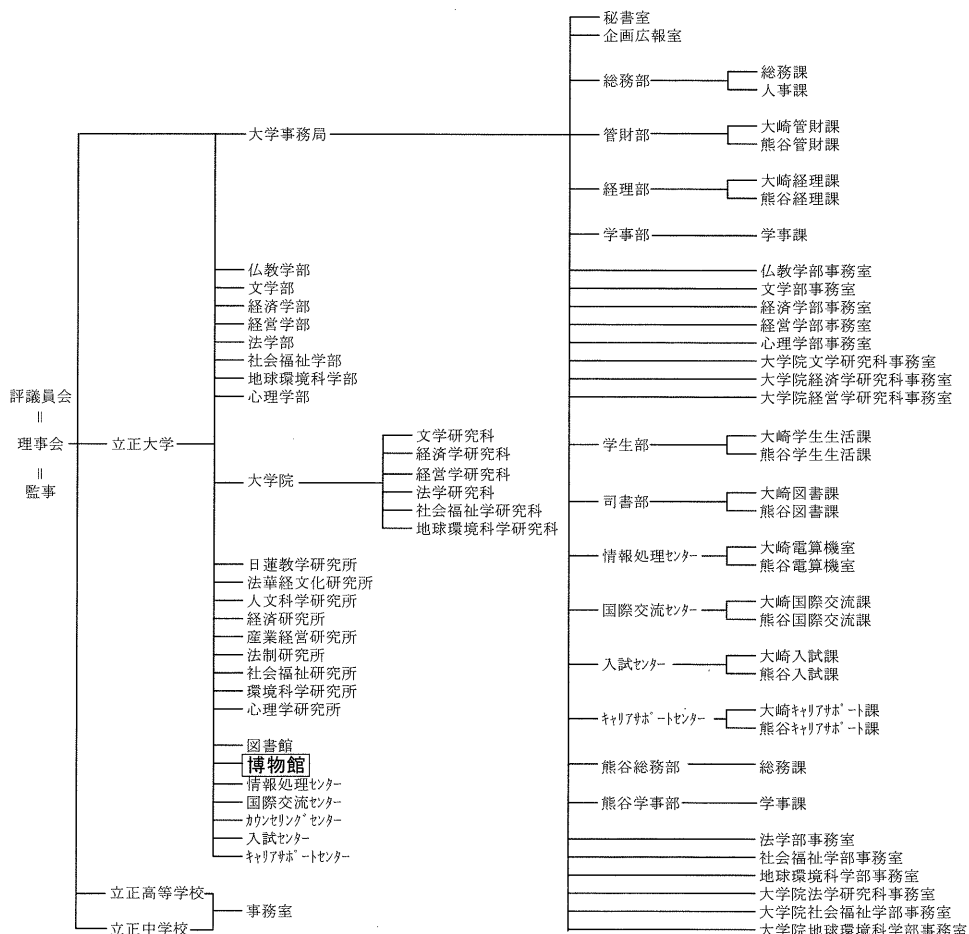
第6号委員 野沢佳美

(文化史関係学識経験者)

第7号委員 島津 弘

(自然誌関係学識経験者)

(2) 立正大学組織表



(3) 立正大学博物館規定

(設定)

第1条 立正大学学則第9条の規定に基づき、熊谷キャンパスに「立正大学博物館」(以下「博物館」という)を置く。

(目的)

第2条 博物館は歴史・芸術・民俗・産業・自然誌に関する学術的資料(以下「資料等」という)を収集、保管し、これを組織的に展示し、広く社会に公開するとともに、これらの調査研究を行うことによって大学における教育・研究の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 博物館は前条に規定する目的を達成するため、次の事業を行う。

- 一 資料等の収集、整理および保管
- 二 資料等の展示および公開
- 三 調査研究活動
- 四 調査研究成果の発表および出版
- 五 本学における博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力
- 六 講演会、講習会および特別展示会の開催
- 七 その他必要な事業

(職員)

第4条 博物館に次の職員を置く。

- 一 館長
- 二 専門職員

(館長)

第5条 博物館に館長を置く。

- 2 館長は博物館を代表し、博物館の教務を総括する。
- 3 館長は全学協議会に諮り、本学専任教職員より学長が任命する。
- 4 館長の任期は3年とし、再任を妨げない。

い。

- 5 館長が欠けたときは、補充しなければならない。この場合において、その任期は前任者の残任期間とする。

(専門職員)

第6条 専門職員は第3条に定める事業に従事するとともに、これに関連する業務を行う。

- 2 専門職員は博物館学芸員の資格を有するものとし、任期は3年とする。

(運営委員会)

第7条 博物館の管理運営に必要な事項を審議するため、博物館運営委員会(以下「委員会」という)を置く。

(委員会・構成)

第8条 委員会は、次の者を以って構成し、学長が委嘱する。

- 一 館長
 - 二 専門委員
 - 三 学部長から2名
 - 四 研究所長から2名
 - 五 博物館学芸員関係学識経験者から1名
 - 六 考古学および文化史関係学識経験者から1名
 - 七 自然誌関係学識経験者から1名
- 2 館長の推薦により、前項に定め 委員会のほか、学識経験者若干名を加えることができる。学識経験者委員の委嘱は学長が行う。
 - 3 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者に出席を求め、意見を聴くことができる。

(委員の任期)

委員の任

第9条 前条第三号乃至六号および第2項の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

- 2 任期中に欠員が生じた場合は、委員を補充し、任期は前任者の残任期間とする。

(委員会の運営)

第10条 委員会は、館長が召集し、議長となる。

- 2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は出席委員の過半数の同意をもって決する。

(委員会の審議事項)

第11条 委員会は、以下の事項について審議する。

- 一 資料等の収集、整理、保管、展示および公開に関する事項
- 二 博物館の管理運営に関する事項
- 三 調査研究活動ならびにその成果の

発表および出版に関する事項

四 博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力に関する事項

五 博物館の予算・決算に関する事項

六 その他必要な事業に関する事項

(細則)

第12条 この規定に定めるもののほか、管理運営上必要な事項は、立正大学博物館規定細則によるものとする。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は委員会および全学協議会の議を経るものとする。

附則

この規程は平成14年4月1日から施行する。

(4) 立正大学博物館細則

(趣旨)

第1条 この細則は立正大学博物館規程第12条の規定に基づき、同規程の施行について必要な事項を定めるものとする。

(開館日)

第2条 立正大学博物館（以下「博物館」という）の開館日は立正大学学則第31条に定める休業日および土曜日を除く日とする。

(開館時間)

第3条 博物館の開館時間は、午前10時から午後4時までとする。

(入館手続)

第4条 博物館に入館する者は、所定の手続きをとらなければならない。

- 2 館長は博物館における教育および研究活動に支障があると認める場合は、入館を許可しないことがある。

(入館料)

第5条 博物館の入館料は原則として無料とする。

(入館者の義務)

第6条 入館者は博物館の施設・資料等を毀損し、または滅失したときは、直ちに館長に届け出て、その指示に従わなければならない。

- 2 入館者は前項の規定にある損害に対し損害賠償の義務を負わなければならない。ただし、事情によりこれを免除または軽減することができる。

(資料等の利用)

第7条 博物館内において撮影、実測、特殊観察、複製製作の目的で資料等の利用を希望する者は、利用許可申請書を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

- 2 資料の所蔵者または寄託者が学外にあ

る場合は、当該資料の利用を希望する者は事前に所蔵者または寄託者の承認を受け、それを証明する書類を利用許可申請書に添付しなければならない。

3 利用を許可された者は次に掲げる事項を遵守しなければならない。

一 利用に際しては博物館の専門職員の支持に従うこと。

二 利用による成果を刊行物、映画フィルム、ビデオテープ等に発表したときは、本博物館の名称およびその所蔵、または保管である旨を明記すること。

三 利用により生じた著作物等は利用許可申請書に記載の目的以外には使用しないこと。

四 館長は、第1項の利用許可申請書の提出があったときは、審査のうえ利用許可書を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、立正大学博物館運営委員会（以下「委員会」という）の議を経なければならない。なお、館長は管理上支障があると判断した場合は、許可を取り消すことができる。

五 本条第1項による利用許可を受けた者が、当該資料を毀損した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

（資料等の利用料金）

第8条 前条第3項により許可を受けた者は、別に定める利用料金を速やかに経理部に納入しなければならない。

2 館長は、前項の定めにかかわらず次の各号のいずれかに該当する場合は、利用料金を全額免除することができる。

一 各種教育機関や国または地方公共団体および公益法人が行う教育、学術および文化等に関する事業

二 博物館法（昭和26年法律第285号）に規定する博物館等の行う事業

三 学術研究

四 前号のほか、館長が全額免除すべき特別の理由があると認めたとき

3 前項の定めにより利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物1部以上を無償で博物館に納入しなければならない。ただし、館長が認めたときはこの限りでない。

（資料等の貸出）

第9条 資料などの貸出を受けようとする者は、貸出許可申請書を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2 館長は前項の貸出許可申請書の提出があったときは、審査のうえ貸出許可書を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、委員会の議を経て決定しなければならない。

3 館長は管理上支障があると認められる場合は、前項の許可を取り消すことができる。

4 本条第1項による許可を受けた者は、貸出期間中に当該資料等を毀損または滅失した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

（資料等の貸出料金）

第10条 前条第2項による許可を受けた者は、別に定める利用料金を速やかに経理部に納入するとともに、貸出期間中および貸出に伴うすべての経費を負担するものとする。

2 前項の定めにかかわらず、第8条第2

項一号、二号および四号のいずれかに該当する場合は、貸出料金を全額免除する。

- 3 前項の定めにより貸出利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物を1部以上、博物館に寄贈しなければならない。ただし、館長が特に認めたときはこの限りでない。

(寄託)

- 第11条 資料を寄託しようとする者は、その品目、点数、期間等を寄託申請書に記入のうえ、館長に提出するものとする。
- 2 館長は前項に定める寄託の申出があった時は、委員会の審議に附し、受入の承認がなされたものについて、学長に意見書を提出しなければならない。

- 3 館長は寄託を受けた時は、寄託者に対して該当資料の目録を交付するものとする。

- 4 館長は、寄託を受けた資料等について十分な注意を持って保管しなければならない。

(細則の改廃)

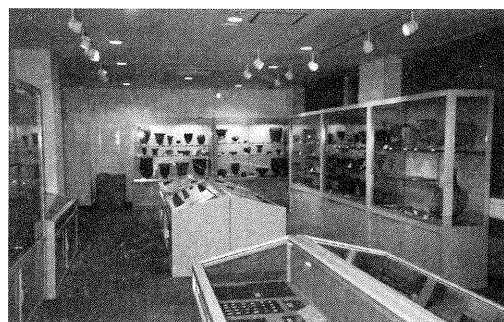
第12条 本細則の改廃は、委員会および全学協議会の議を経るものとする。

(附則)

- 1 この細則に定めのない事項については、館長がその都度、委員会に諮り処理する。
- 2 この細則は平成14年4月1日から施行する。

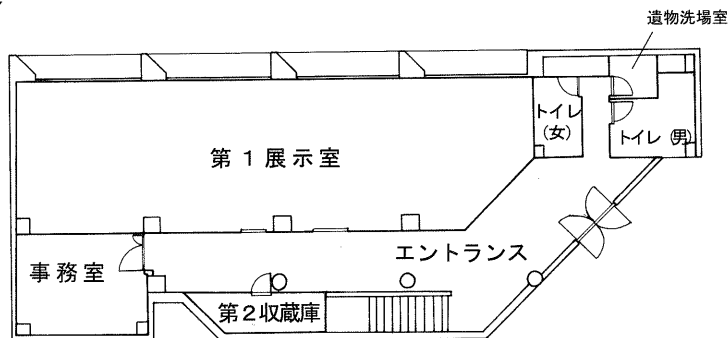


第1展示室

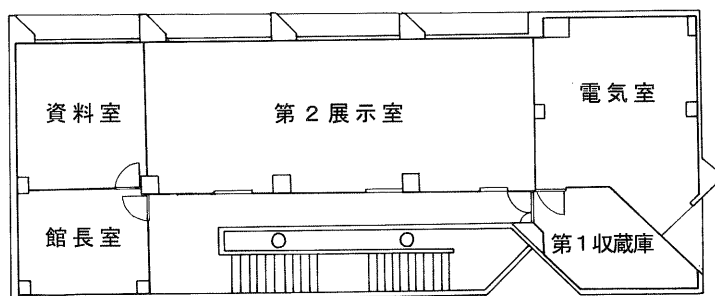


第2展示室

(5) 施 設



博物館 1階 平面図



博物館 2階 平面図

● 建物

所 在・・・埼玉県熊谷市万吉1700
 建築面積・・・376.8㎡
 構 造・・・鉄筋コンクリート造 2階建

● 各室面積一覧

(1階)
 第1展示室・・・93.88㎡
 事 務 室・・・17.10㎡
 第2収蔵庫・・・3.22㎡
 ト イ レ・・・11.01㎡
 遺物洗場室・・・2.26㎡

エントランス・・・45.64㎡

(2階)
 第2展示室・・・71.22㎡
 館 長 室・・・16.98㎡
 資 料 室・・・23.89㎡
 第1収蔵庫・・・12.30㎡
 電 気 室・・・39.00㎡

● 各室仕様

(第1展示室・事務室)
 床・・・タイルカーペット敷
 壁・・・ビニールクロス貼り
 天井・・・ミネラートン
 (第2展示室)
 床・・・タイルカーペット敷
 壁・・・ビニールクロス貼り
 天井・・・ミネラートン

(館長室・資料室)

床・・・タイルカーペット敷
 壁・・・ビニールクロス貼り
 天井・・・ジブトーン

● 電 気 設 備

受 電 設 備・・・6.6KV
 変 圧 器 設 備・・・電灯-100KVA
 動力-80KVA
 照 明 設 備・・・展示室-ハロゲンランプ使用。
 館長室・事務室・

資料室-蛍光灯使用。

● 防 犯・防 災 設 備

防 犯 設 備・・・各室、熱線センサー取付、
 非常通報設備。
 I T V 設 備・・・CCDカメラ4台、
 展示室等監視。
 自動火災報知設備・・・P型1級5回線
 消 火 設 備・・・粉末消火器9台

● 空 調 設 備

空 調 機・・・空冷式、
 パッケージエアコン(個別)

● 給 排 水 設 備

給 水 設 備・・・市水道使用
 給 湯 設 備・・・貯湯式電気湯沸器

● 付 設

収 蔵 庫 1 棟・・・79.32㎡

III. 事業報告

(1) 運営委員会

日 時 平成14年6月3日(月)

AM11:00~PM12:10

会 場 大崎キャンパス 第5会議室

出席委員

坂詰秀一・清水千尋・田口正己・佐美光彦・
竹内 誠・野沢佳美・上野恵司・(田村佳道)

博物館発足にあたり、開会に先立ち業務を担当した加藤吉則常任理事より挨拶があった。

本日の出席者は7名、欠席者2名の報告があり、博物館規定第10条の2項により成立。

議 事

I. 報告事項

- 1, 予 算
- 2, 開館記念式典
- 3, 現況報告

II. 審議事項

- 1, 博物館実習生の受け入れについて
- 2, 埼玉県博物館連絡協議会加入の件
- 3, 登録博物館申請について
- 4, 年間スケジュールについて
- 5, 公開講座、出版物に関する件
- 6, その他

(2) 平成14年度収支計算書

予 算 科 目		14年度当初 予算	14年度 補正額	14年度補正後 予算	決 算	増 減
目的及び大科目	小(細)科目					
人 件 費		0	112,000	112,000	110,471	1,529
	教員人件費	0	12,000	12,000	11,111	889
	その他の手当て (教・本)	0	12,000	12,000	11,111	889
	職員人件費	0	100,000	100,000	99,360	640
	雑給(職・兼)	0	100,000	100,000	99,360	640
教育研究経費		1,999,000	107,000	2,106,000	2,027,468	78,532
	会議会合費	60,000	-20,000	40,000	33,360	6,640
	旅費交通費	219,000	-19,000	200,000	197,380	2,620
	その他の旅費交通費	219,000	-19,000	200,000	197,380	2,620
	通信運搬費	260,000	-40,000	220,000	201,496	18,504
	電 話 料	120,000	0	120,000	96,306	23,694
	その他の通信運搬費	140,000	-40,000	100,000	105,190	-5,190
	消耗品費	190,000	95,000	285,000	283,375	1,625
	印刷製本費	1,150,000	119,000	1,269,000	1,221,392	47,608
	コピー料	390,000	-30,000	360,000	318,224	41,776
	その他の印刷製本費	760,000	149,000	909,000	903,168	5,832
	諸 会 費	0	10,000	10,000	10,000	0
	図書資料費	100,000	-50,000	50,000	49,615	385
	手数料報酬	0	12,000	12,000	11,111	889
	雑 費	20,000	0	20,000	19,739	261
設備関係支出		0	200,000	0	0	0
	教育研究用機器備品	0	200,000	0	0	0
合 計		1,999,000	419,000	2,218,000	2,137,939	80,061

(3) 開館日数・入館者数

平成14年4月1日から平成15年3月31日の間で、博物館は164日開館した。本来大学休業日である夏・春休中は開館していないが、今年は初年度ということもあり、できる限り開館に努めた。

入館者数は、4月が計531人、5月が計282人、6月が計233人、7月が計744人 8月が計15人 9月が計200人 10月が計206人 11月が計384人、12月が計63人、1月が計11人、2月が計22人、3月が計78人、合計 2,769人であった。

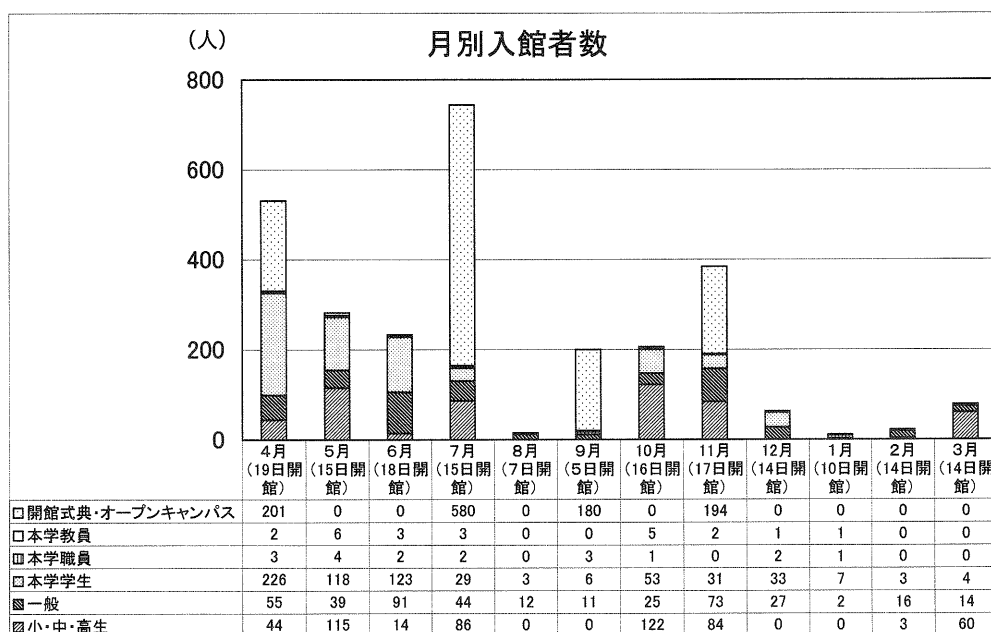
その内訳は、下記の表が示すように、小・中・高校生が計528人 一般が計409人、本学学生が計636人、本学職員が計18人、本学教員が計23人、開館式典・オープンキャンパスが計1,155人であった。

開館式典・オープンキャンパスでの多数の入館者数を除くと、本学学生の入館が最も多い。これは、講義やゼミの一環として博物館を使用している点も、一つの要因といえよう。

この本学学生とした中には、他大学の学生も若干含むと思われるが、初年度のため明確な区分をしなかったため、全て本学学生として取り扱った。

小・中・高校生の入館者数も多いが、実際はその殆どが高校生であり、大学見学の折、博物館もコースに入っているため、このような結果となっている。

また、一般入館者数も少ないものの、年間を通して来館していただいている。



(4) 出 版

本年度は、博物館の開館にあたり、次の出版物を刊行した。

- ・『立正大学博物館年報』第1号
- ・立正大学博物館館報『万吉だより』創刊号
- ・『立正大学博物館案内』
- ・『立正大学博物館要説』
- ・『館蔵資料基礎文献叢刊』第1冊

(5) 展 示

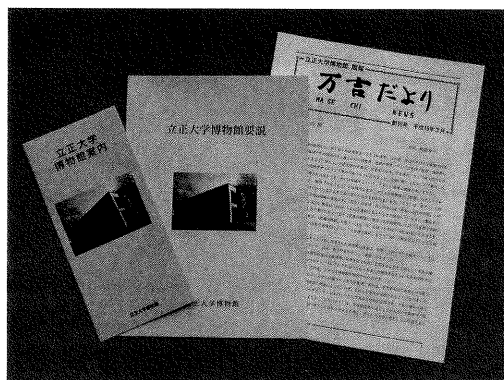
常 設

①ネパール・ティラウラコット出土資料群

1967年～1977年にかけて、立正大学がネパール王国に派遣した発掘調査団によって発掘された資料であり、とくに日ネ親善のためネパール考古局より寄贈された資料である。

ティラウラコット遺跡は、釈尊出家の故城ーカピラ城跡の有力な比定遺跡として世界の学界に知られていた。その地を10年間にわたって発掘調査した結果、カピラ城跡の最有力遺跡として注目されるにいたっている。

東西約400m、南北約480mの方形の城跡内に7つの遺丘が存在し、その中の2つを発掘して得られた資料である。



刊 行 物

②旧石器時代～古墳時代

旧石器時代～古墳時代にわたる資料。

旧石器時代では、日本の旧石器時代の代表的遺跡として知られる北海道白滝遺跡の出土品と本学が発掘した北海道報徳遺跡、神奈川県朝日遺跡の出土品などがある。とくに朝日遺跡は、獅子文六『箱根山』に登場する遺跡として有名であるが、神奈川県下で初期に発掘された旧石器時代の遺跡としても知られている。

縄文時代では、埼玉県石神貝塚、千葉県築地台貝塚の出土品などがあり、とくに石神資料は縄文時代後～晩期の貝塚群の一括資料として知られている。



ティラウラコット出土の土器

弥生時代では、東京都久ヶ原出土の弥生式土器がある。弥生時代後期の集落跡として著名な遺跡から昭和10年代に出土したものとして古くから考古学界に知られている。

古墳時代の資料として、埼玉県野原古墳群の発掘調査資料を展示している。耳飾、直刀、鉄鏃、須恵器など。

ほかに、弥生時代の伝福岡県須玖出土の銅戈、福岡県出土の甕棺、昭和の初頭の寄贈品の鏡（位至三公鏡）などが、展示されている。

③古代窯跡発掘の須恵器・瓦博・硯・瓦塔

1958年～1980年にかけて立正大学考古学研究室が、文部省の科学研究費の交付などを受けて実施した「古代窯業の考古学的研究」によって発掘された資料である。

青森県に存在する北限の五所川原〔前田野目〕窯跡、出羽（山形県）の荒沢・町沢田窯跡、上野（群馬県）の金山瓦窯跡・上小友窯跡、信濃（長野県）の宮洞・若宮・御牧ノ上・八重原窯跡、武蔵（埼玉県）の亀ノ原・新沼・山田・宮ノ前・虫草山・東金子などの窯跡、備後（広島県）の青水窯跡、筑前（福岡県）の平田窯跡などからの出土品で、いずれも古代生産の実態、土器の編年、瓦博の供給問題についての貴重な資料として知られている。

④古代～近世

古代～近世にかけての資料。

古代では、千葉県九十九坊廃寺・同長熊廃寺跡の出土品がある。とくに、長熊廃寺跡は、本学が1951年から'53年にかけて発掘した遺跡として知られている。土師器の火葬骨蔵器は、主として神奈川県下出土品。

中世では、板碑・骨蔵器、近世では、東京都増上寺徳川将軍家関係墳墓出土の一字一石経などが展示されている。

⑤熊谷キャンパス内出土資料

熊谷キャンパスにおける施設の新築などに際して、法（文化財保護法）によって定められた遺跡の発掘調査を実施しているが、その折、貴重な資料が出土している。

とくに旧石器時代後期の石器群、縄文時代早期の土器群の出土は、埼玉県内の旧石器文化の様相、土器文化の起源を探るうえできわめて貴重な資料として注目されている。また、古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡、江戸時代の遺跡も発掘され、教育の場、研究資料としても活用されている。

調査を担当している立正大学熊谷校地遺跡調査室は、他大学に先がけて設置された調査機関であり、国立・私立大学の先駆的事例として諸大学の参考となっている。



東金子窯跡群（埼玉県）出土の瓦

⑥樺太出土資料

久保常晴氏（元本学名誉教授）寄贈の樺太出土資料（土器・石器・骨角器）は、同氏が1930年代に樺太の地を調査した際に出土したものである。

樺太出土の資料は、現在、日本各地に所蔵されているが、その一つとして立正大学所蔵品の存在が知られている。

⑦吉田 格コレクション

吉田 格氏（立正大学専門部地歴科・昭和16（1941）年卒）寄贈のコレクションである。吉田氏は縄文時代研究の学者として著名であり、とくに縄文時代早期の花輪台式、後期の称名寺式は氏によって設定された型式標準資料として学界に周知されている。

関東地方でもっとも早く発掘された旧石器時代後期の遺跡（熊ノ郷・殿ヶ谷戸・西之台Bなど）、縄文時代各時期の遺跡群からの出土資料、とくに早期の花輪台式・子母口式、後期の称名寺式・堀之内式、晩期の安行各式土器は、多数の土製耳飾りおよび諸貝塚出土の骨角製品とともに広く知られている。とくに称名寺貝塚出土の土器・石器・骨角器および骨角器原料（鹿角）は縄文時代の研究上、きわめて重要な資料である。



称名寺B貝塚出土の土器

本草学者・伊藤圭介（日本最初の理学博士）蒐集の石器は『日本産物誌』明治9（1876）年に収められているものであり、嘉永5（1852）年の箱書きを持つ収蔵箱に収められている石器とともに、きわめて貴重な資料として吉田コレクションに収められている。

⑧撫石庵コレクション

眞鍋孝志氏（古鐘研究会会長）より寄贈されたアジア諸地域の梵音具を中心とするコレクションである。

日本をはじめ、朝鮮半島・中国・タイ・ミャンマー・スリランカなどアジア各地の梵音具（鐘・鐸）のほか、金銅釈迦如来立像などが含まれている。

アジア梵音具の資料として稀有のコレクションであり、中国の甬鐘、伝タイの銅鼓をも加えての資料は注目される。

とくに、伝檀原市出土の平安時代の梵鐘は、わが国の初現期の梵鐘として10指に入るもので、きわめて貴重な資料である。



伝檀原市出土の梵鐘

(6) 収集・保存

本年度は、眞鍋孝志氏(日本古鐘研究会会長)から梵音具を中心とするコレクションを、高知県物部村・宮崎県椎葉村・諸塚村の関係者から御幣が寄贈された。尚、物部村関係の資料寄贈に当たっては、小松清貴氏(物部村教育委員会)の御尽力あった。

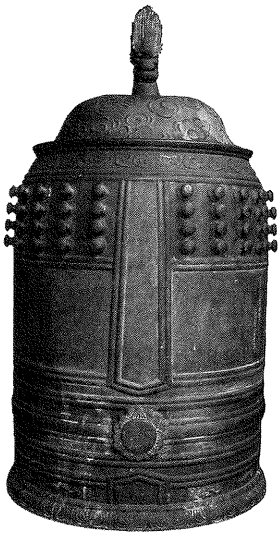
(眞鍋氏寄贈)

梵鐘 1・半鐘 2・鰐口 1・双盤 1・伏鉢 1・鈴 4・木製小槌 1・華鬘 1・銅 1・鈴 1・ベル 3・九鈎杵 1・方位磁針 2・瓦片・木器片・メダル

(物部村)

・中山義弘・森安正芳氏寄贈

えぶす倉入れ幣・水神・金神幣・小木ノ幣・天狗の山渡り幣・大天狗ノ幣・水神おんたつ幣・水神めんたつ幣・水神送り幣・氏神・土神・神木の幣・屋ノ神幣・大公神ノ幣・恵比寿・人かた人形・もっこう幣・山ミサキ・川ミサキ・山の神・神道の就い幣・二つたたきの紙じめ・門公神(2点)・関ざね・しめの子・式王子・もりかえ祈祷の幣・縄(4点)



梵鐘・日本

(椎葉村)

・椎葉吉人氏寄贈

ごたいさん・じょうの御幣(2点)・大神幣・五頭天皇の幣・ちんち幣・いなり幣・めん棒・くらの神の幣・火の神の幣・かまどの神の幣・水神幣・山の神の幣

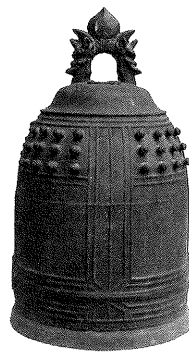
・尾前秀久氏寄贈

神光・荒神・山の神・水神(3点)・火の神・稻荷

(諸塚村)

・岡田秀光氏寄贈

腰幣・稻荷様の御幣・廻り幣・日神・月神・春日大明神・すみとり紙



半鐘・日本



鐘・ベトナム



鰐口・日本

(7) 調査研究

視察報告

中国・大鐘寺(大鍾寺)古鐘博物館

1. はじめに

大鐘寺古鐘博物館は、北京市街を囲んでいた城壁の外側、西北郊外の海淀区北三環西路甲31号に位置しています。

前身は、永樂大鐘を有する覚生寺という由緒あるお寺でした。1980年3月、北京市人民政府により大鐘寺文物保管所が、そして1984年11月、大鐘寺古鐘博物館が設立されました。また、1985年10月には、伽藍が本来の姿に復元され、収集・収蔵された鐘が公開されるようになりました。

現在では、建築面積5,500㎡、展示面積30,000㎡、所蔵品は700余点で、1996年にはこれを基礎に大規模な環境整備が行なわれ、現在の姿となっています。

2. 覚生寺

前身の覚生寺は、雍正11(1733)年に創建され寺で、以前は都(北京)西門外の曹家庄(荘)にありました。

覚生寺の建物は雍正帝の勅命により建立された寺であり、現在も山門に雲竜の石製額があり、その中心には雍正帝直筆の覚正寺建立の勅命が書かれています。

覚生寺は、南北に配置されており、南から北へ順次、影壁、山門、天王殿、大雄宝殿、観音殿、藏経楼などの建造物を主に、両側には鐘・鼓楼、配殿、群房があ

り、当時の都西北の重要な寺でした。

覚生寺が建立されてすぐ、万寿寺の永樂大鐘が移されることになり、10年後の乾隆8(1743)年に全ての作業が終了しました。

これ以後、大鐘が鳴り響き、次第に都の一大景観となり、いつしか人々は覚正寺を「大鐘寺」と呼ぶようになりました。

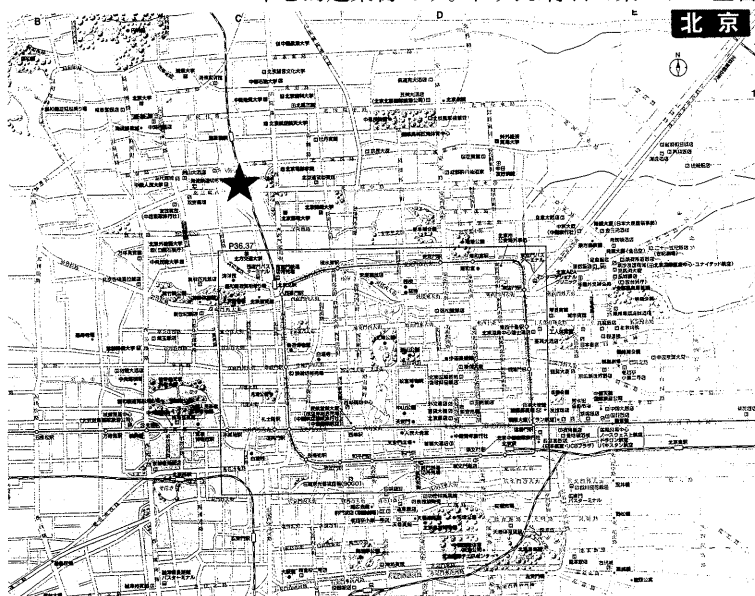
乾隆52(1787)年、大鐘寺は雨乞いの祈願場所に指定され、その後多くの皇帝が大鐘寺で雨乞いの儀式を行ない、清朝末期に至るまで続けられました。

3. 展示施設

展示施設は、「永樂大鐘」「古鐘の優品」「戦国扁鐘」「古鐘の略史」「鐘林」「九亭鐘園」「外国の古鐘」「鑄造工程」などにわたっており、約4,000年にわたる古鐘の歴史が簡単に理解できるようになっています。

(1) 永樂大鐘

永樂大鐘の展示施設・鐘楼は、この博物館の中心的建築物です。巨大な青石で築かれた基台



位置図

の上に建ち、建物自体は上下2層に分かれ、下層は方形、上層は円形を呈しています。

永楽大鐘は、高さ6.75m、口径3.3m、重さ4.65tあり、安全に永楽大鐘の重量を支える為に、梁は3層に重複し縦横に組まれる構造の方法が用いられていました。

清代の北京竹枝詞には、永楽大鐘が「梁に取手部を通し、下に池を掘って鐘の音を散らした。」と記載されている。この「共鳴」作用をもつ石池は、直接青石の基台上に作られ、八角形を呈し、池の深さは0.7m、直径4.0m、池の表面から鐘まで1.0mありました。

この永楽大鐘の頂上部には、直径約15cmの穴があいており、何時から始まったかは不明ですが、「金銭眼を打つ」という遊びが盛んに行われ、銅銭が穴に入れば来年吉を得るといわれ、現在も続いています。文献によると、毎年元旦から15日までの半月の間は、「金銭眼」より池の中に落ちた銅銭が池の半分以上の高さまで積み上がり、当時、寺院内の僧侶は1年間生活するのに困らなかったそうです。

(2) 古鐘の優品

この展示施設は、収蔵する多くの鐘の内、各時代を代表する鐘が展示されています。比較的大形のものが多く、銘文が施されているものが殆どであり、中国の古鐘の変化が一目でわかるようになっています。

(3) 戦国時代の扁鐘

この展示施設は、古代の儀礼に用いられた打楽器の一つ、扁鐘を中心に展示しています。

特に、1978年湖北省の曹侯乙墓から出土した、扁鐘65点中、紐鐘19点、甬鐘45点、その他1点が3層9組に分けられ掛けられていた、鐘台のレプリカはすばらしく、実物は総重量2,500kgあり、鐘上には全て記事、標音、音階に関する

象眼の銘文が書かれていました。現在でも、時間になるとこの扁鐘で演奏された音楽が鳴るようになっていました。

(4) 古鐘の略史

この展示施設は、中国で最も早く出現し土製の鐘から、金属が出現し銅鑄、銅鈴、銅鐘が作られ始め、次第に扁鑄、扁鈴、扁鐘として発展して行く過程が理解できるようになっています。

(5) 鐘林

この展示施設には、中国の様々な古鐘が展示されています。礼鐘、樂鐘、仏鐘、道鐘、さらに朝鐘、更鐘など数多くの古鐘が見学できます。



平面図

(6) 九亭鐘園

この部分は、野外展示であり面積2,200㎡、建築面積700㎡を占め、9の鐘の建物(亭)と32の鐘の廊下から成り立っています。全国32の省、市、自治区そして香港特別行政区に特有の古鐘を吊るしてあります。

(7) 外国の古鐘

この展示施設は、海外の様々な鐘が展示されています。ヨーロッパの教会の鐘や、日本の梵鐘の写真なども展示されています。

(8) 鑄造工程

この展示施設は、中国の鑄造技術の変遷が理解できるよう部屋で、直接見ることができる立体模型や、製作や操作方法などを模し古代の鑄造工程がわかるような展示がされています。

4. おわりに

大鐘寺古鐘博物館には、坂詰秀一館長と共に執筆した「立正大学学園寄贈の「撫石庵コレクション」について」(『梵鐘』第13号 平成13

年11月 日本古鐘研究会)中の中国鐘が、古鐘博物館の副館長であり、中国鐘研究の第一人者である全綿云女史に注目され、女史の知人である神崎勝氏(妙見山遺跡調査会)を介して、博物館への訪問を進められていたこともあり、仏教考古学研究奨励基金運営委員会(会長坂詰秀一)からの、派遣による中国視察の折、平成14年9月13日に訪問した。

当日は館長の高凱軍氏にもお会いし、丁寧に対応していただいた。そのお話の中で、「いつの日か、鐘を題材とした世界的なシンポジウムを開きたい」との意見が館長から出され、「その手始めとして、当館と同じように鐘を所蔵する立正大学博物館とより一層の交流を深めたい」と、館長に伝えて欲しいとの言葉をいただいた。所蔵する鐘の質・量とも、大鐘寺古鐘博物館は、すばらしいものであった。この経験を生かし、当博物館が所蔵する鐘の、より一層の活用に努めたい。

(上野恵司)



山 門



鐘林・第1展示室

(8) 教育普及

平成14年8月5日(月) から11日(日) の7日間、本学学生の博物館館務実習を実施した。

(実習内容)

8月5日(月)

- ・ 午前の部
館長挨拶
館務実習の説明
館の概要説明
- ・ 午後の部
館内施設の見学
「写真撮影」(1)
須恵器坏・甕の撮影

8月6日(火)

- ・ 午前の部
「写真撮影」(2)
須恵器坏・甕の撮影
- ・ 午後の部
「講義・学芸員について」
(講師 吉川國男 先生)

8月7日(水)

- ・ 午前の部
「考古学資料の取り扱い」(1)
遺物の洗浄・注記
- ・ 午後の部
「考古学資料の取り扱い」(2)
遺物の洗浄・注記

8月8日(木)

- ・ 午前の部
「展示パネルの作製」(1)
解説文の作製
- ・ 午後の部
「展示パネルの作製」(2)

パネルの作製

8月9日(金)

- ・ 午前の部
「考古学資料の取り扱い」(3)
遺物の接合
- ・ 午後の部
「考古学資料の取り扱い」(4)
遺物の接合拓本・復元

8月10日(土)

- ・ 午前の部
「写真撮影」(3)
現像した写真をみて
- ・ 午後の部
討論会
「博物館実習に参加して」

8月11日(日)

- ・ 午前の部
地球環境科学部内施設見学
(講師 島津 弘先生)
- ・ 午後の部
「写真判読法」(地形分類図・土地利用図)
(講師 島津 弘先生)
- ・ 終了式



実習参加者

IV. 日誌抄

< 4月 >

・ 1日 (月)

坂詰館長・上野専門委員・田村博物館員本日より勤務。今後の開館日程について打ち合わせ。開館記念式典が熊谷校舎ステラ1階食堂において午後4時30分より行われた。

来館者、計201名

・ 2日 (火)

森本公子 (東松山市埋蔵文化財センター)、学生42名

・ 3日 (水)

一般4名 (行田市・白岡町)、学生16名

・ 4日 (木)

一般8名 (北本市・川越市・熊谷市・鶴ヶ島市)、学生7名

・ 5日 (金)

一般2名 (鴻巣市)、職員1名、学生1名

・ 8日 (月)

一般5名 (川越市・秩父市・行田市)、学生3名

・ 9日 (火)

一般1名

・ 10日 (水)

栗原伸道 (所沢市文化財保護委員会)、野沢均・照林敏郎 (朝霞市博物館)、一般9名 (鶴ヶ島市・日高市・江南町・嵐山町)、学生14名

・ 11日 (木)

教員1名・学生43名

・ 12日 (金)

野見山 (橘父兄による会館内撮影)、高橋 (毎日新聞社取材)、一般2名 (熊谷市)、学生6名

・ 15日 (月)

一般1名 (小金井市)、学生28名

・ 16日 (火)

大学見学 (白岡高校生43名・高校教員1名)、一般1名 (深谷市)

・ 17日 (水)

一般2名 (滑川町)、教員1名・職員1名・学生11名

・ 18日 (木)

一般3名 (茨城県・熊谷市)、学生21名

・ 19日 (金)

矢澤高太郎・片岡正人 (読売新聞社取材)、学生7名

・ 22日 (月)

学生7名

・ 24日 (水)

一般3名 (富士見市・熊谷市)、堀淵・本多 (丸善・環境デザイン)、学生9名

・ 25日 (木)

一般2名 (国立市・深谷市)、職員1名・学生7名

・ 26日 (金)

田島豊穂・及川建築計画工房 (熊谷市)、高校生1名、学生4名

< 5月 >

・ 8日 (水)

一般3名 (久喜市・花園町)、学生22名

・ 9日 (木)

学生40名

・ 10日 (金)

一般4名 (東松山市)、学生1名

・ 13日 (月)

一般6名 (熊谷市・行田市・深谷市・館林市)、他大学生1名、学生8名

・ 15日 (水)

大学見学 (国際学院高校生徒28名・高校教員1名大野彰久)、一般4名 (大利根町・八王子市)、職員2名・学生2名

・ 16日 (木)

一般3名 (熊谷市・蓮田市)、教員2名・学生13名

・ 17日 (金)

北尾義昭 (元本学常任理事)、一般1名 (妻沼町)、学生3名

・ 20日 (月)

職員2名・学生6名

・ 22日 (水)

岡安一之 (大宮南高校教員)、園田幸作 (小川高校教員)、教員1名・学生6名

・ 23日 (木)

一般2名 (鴻巣市)・学生1名

・ 24日 (金)

- 大学見学(深谷第一高校生徒87名)・一般3名
(行田市・福島市)、教員1名・学生3名
- ・27日(月)
学生3名
 - ・29日(水)
一般5名(東松山市・桶川市・練馬区・杉並区)、
学生2名
 - ・30日(木)
学生2名
 - ・31日(金)
平田一乗(練馬区)・学生5名

< 6月 >

- ・3日(月)
平成14年度第1回博物館運営委員会開催のため、
臨時休館。大崎校舎第5会議室にて午前11:00～
午後12:15まで会議。
- ・5日(水)
一般4名(さいたま市・熊谷市・横浜市)、教員
1名・学生5名
- ・6日(木)
教員1名・学生3名
- ・7日(金)
一般3名(桶川市・行田市)、職員2名・学生4
名
- ・10日(月)
学生1名
- ・11日(火)
大学見学(吉見高校生徒14名・高校教員1名)
- ・12日(水)
横川吉富(埼玉県文化財保護審議委員)、荏原淳・
鬼塚和典(庄和町教育委員会)、一般2名(沼田
市)、教員1名・学生8名
- ・13日(木)
学生10名
- ・14日(金)
一般2名(船橋市)、学生3名
- ・17日(月)
一般3名(さいたま市・熊谷市・和光市)、学生
20名
- ・19日(水)
大学見学(深谷高校保護者49名)、安西祐子(卒

- 業生)、一般2名(熊谷市・江東区)、学生3名
- ・20日(木)
一般2名(新座市・蕨市)、学生2名
 - ・21日(金)
学生2名
 - ・23日(日)
橘父兄会関係者18名他多数(父兄会地方懇談会
熊谷会場開催)
 - ・24日(月)
仏教タイムス社取材、一般1名(熊谷市)、学生
1名
 - ・26日(水)
学生4名
 - ・27日(木)
一般2名(所沢市)、学生55名
 - ・28日(金)
一般2名(板橋区)、学生2名

< 7月 >

- ・1日(月)
学生2名
- ・3日(水)
学生4名
- ・4日(木)
鋳物師関連会社3名(川口市)・学生5名
- ・5日(金)
教員2名・学生3名
- ・10日(水)
大学見学(毛呂山高校生徒14名・高校教員1名)、
市川修(さいたま川の博物館)、一般1名(熊谷
市)、学生7名
- ・15日(月)
教員1名・学生2名
- ・17日(水)
一般1名(熊谷市)、学生2名
- ・18日(木)
中島宏・末木啓介・栗岡真理子(県立歴史博物館)、
一般2名(鳩山町・蓮田市)、学生5名
- ・19日(金)
学生4名
- ・22日(月)
各務丈信(江南町)

- ・24日(水)
職員1名
- ・25日(木)
大学見学(本庄第一高校生徒72名・高校教員2名)
- ・26日(金)
大学見学(館林商工高校保護者24名・高校教員5名)
- ・29日(月)
職員1名
- ・31日(水)
オープンキャンパス 580名

<8月>

- ・5日(月)
博物館実習 第1日目
- ・6日(火)
同2日目、学生3名
- ・7日(水)
同3日目、武石直彦・美恵子・歩(熊谷市)
- ・8日(木)
同4日目
- ・9日(金)
同5日目、野村武朗・長野武郎・平井茂樹・小林文治・佐々木徳明・小峯秀雄(国分寺市教育委員会)
- ・10日(土)
同6日目
- ・11日(日)
同7日目、一般3名(小山市)

<9月>

- ・20日(金)
一般4名(品川区・小金井市・松戸市)、職員2名
- ・25日(水)
一般2名、職員1名・学生3名
- ・26日(木)
開館
- ・27日(金)
一般4名(品川区・三鷹市・松戸市・佐野市)、学生4名

- ・28日(土)
オープンキャンパス 180名

<10月>

- ・2日(水)
大学見学(吉岡小学校生徒6名・小学校教員1名)、一般4名(さいたま市・上尾市)、職員1名・学生4名
- ・3日(木)
大学見学(鴻巣高校生徒43名)、斉藤善夫(富山県・日本古鐘研究会)、学生6名
- ・4日(金)
学生1名
- ・7日(月)
開館
- ・9日(水)
一般3名(深谷市・吉見町・川本町)、学生3名
- ・10日(木)
学生5名
- ・11日(金)
教員1名・入試情報誌関係者2名・学生1名
- ・16日(水)
大学見学(高崎北高校生徒40名、高校教員2名)・教員1名、学生25名
- ・17日(木)
教員1名・学生2名
- ・18日(金)
教員2名・学生1名
- ・21日(月)
教員1名
- ・23日(水)
増子章二(卒業生)・一般7名(熊谷市・滑川町・横浜市・川崎市)
- ・24日(木)
学生1名
- ・25日(金)
水谷芳春(桑名市教育委員会)・大学見学(伊勢崎高校生徒33名、高校教員1名)
- ・28日(月)
学生5名
- ・30日(水)
永谷嘉之(クマヒラ)

<11月>

- ・ 1日(金)
学生1名
- ・ 3日(日)
オープンキャンパス186名、一般52名、学生7名
- ・ 6日(水)
学生3名
- ・ 7日(木)
一般1名(越生町)
- ・ 8日(金)
一般4名(江南町)、中川恒(㈱フジトミ)、学生3名
- ・ 11日(月)
千葉貢(高崎経済大学)、教員2名・学生1名
- ・ 13日(水)
一般4名(熊谷市)
- ・ 14日(木)
学生1名
- ・ 15日(金)
一般3名(熊谷市・新潟市)
- ・ 18日(月)
学生1名
- ・ 20日(水)
大学見学(立正大学付属島根県浜南高校生徒13名)、学生6名
- ・ 21日(木)
埼玉県北部地区教育委員会による大学見学。森下昌市郎(花園町教育委員会)、古池普祿(深谷市教育委員会)、鎌田義夫・諏佐一夫(北部教育事務所)、小林高(寄居町教育委員会)、出縄康行(大里町教育委員会)、荒川弘(妻沼町教育委員会)、学生1名
- ・ 22日(金)
大学見学(本庄第一高校生徒63名)
- ・ 25日(月)
諏訪問順(小田原市教育委員会・卒業生)、学生2名
- ・ 27日(水)
一般1名、学生1名
- ・ 28日(木)
大学見学(川口青陵高校生徒8名、高校教員1名)、学生4名

・ 29日(金)

入試情報誌関係者2名、一般1名(熊谷市)

<12月>

- ・ 2日(月)
学生3名
- ・ 4日(水)
一般1名(川越市)、学生2名
- ・ 5日(木)
一般2名(熊谷市・上里町)、学生2名
- ・ 6日(金)
学生3名
- ・ 9日(月)
学生3名
- ・ 11日(水)
開館
- ・ 12日(木)
学生1名
- ・ 13日(金)
木元隆・吉田茂雄(熊谷商工会議所)、市川春洋(信山社)、一般2名(上尾市・滑川町)、職員1名・学生1名
- ・ 16日(月)
学生2名
- ・ 18日(水)
大山俊英・中村京勲(㈱トリコロール)、教員1名・職員1名・学生15名
- ・ 19日(木)
開館
- ・ 20日(金)
開館
- ・ 22日(日)
小高幸男(橘考古学会)他8名
- ・ 26日(木)
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団(大里町)8名、大学生1名

—平成15年—

<1月>

- ・ 15日(水)
開館
- ・ 16日(木)

- 学生 2 名
- ・ 17 日 (金)
 - 一般 1 名 (桶川市)、学生 2 名
- ・ 20 日 (月)
 - 開 館
- ・ 22 日 (水)
 - 開 館
- ・ 23 日 (木)
 - 学生 1 名
- ・ 27 日 (月)
 - 及川一普 (八王子延寿院)、職員 1 名、学生 2 名
- ・ 29 日 (水)
 - 開 館
- ・ 30 日 (木)
 - 開 館
- ・ 31 日 (金)
 - 教員 1 名

< 2 月 >

- ・ 3 日 (月)
 - 開 館
- ・ 5 日 (水)
 - 開 館
- ・ 6 日 (木)
 - 開 館
- ・ 7 日 (金)
 - 一般 1 名 (東松山市)、学生 1 名
- ・ 10 日 (月)
 - 納谷昌彦 (日本地理学会)、一般 1 名、学生 1 名
- ・ 12 日 (水)
 - 一般 1 名 (熊谷市)
- ・ 13 日 (木)
 - 一般 1 名 (富士見市)、高橋・新船・豊田 (小鹿野高校学生)
- ・ 17 日 (月)
 - 一般 1 名 (川崎市・鎌倉市・相模原市)
- ・ 19 日 (水)
 - 学生 1 名
- ・ 20 日 (木)
 - 開 館
- ・ 24 日 (月)
 - 開 館。アルバイト・清水慎也本日より出勤

- ・ 25 日 (火)
 - TBS テレビ取材撮影、「世界遺産・ルンビニー」
(ネパールティラウラコット遺跡出土遺物)、一般 1 名 (川越市)
- ・ 26 日 (水)
 - 開 館
- ・ 27 日 (木)
 - 一般 5 名 (さいたま市・玉川村・岩手県)

< 3 月 >

- ・ 3 日 (月)
 - 一般 1 名 (熊谷市)
- ・ 5 日 (水)
 - 一般 1 名 (群馬県境町)、『博物館年報』準備 (原稿)
- ・ 6 日 (木)
 - 運営委員会開催準備、『万吉だより』配付準備。
一般 2 名 (熊谷市・花園町)
- ・ 10 日 (月)
 - 『博物館年報』準備 (原稿)、『万吉だより』配付準備。加藤邦雄 (卒業生)・啓之 (札幌市)、原島高 (青梅市)
- ・ 12 日 (水)
 - 一般 2 名 (松戸市・横須賀市)『万吉だより』学内各部署配付依頼
- ・ 13 日 (木)
 - 平成15年度第 1 回運営委員会の開催案内を各委員宛郵送。学生 1 名
- ・ 16 日 (日)
 - 午後 3 時、ネパールよりの見学来館者対応。
Bimalkumarsharma・Bhim DhOJ Shrestha
- ・ 17 日 (月)
 - 大学見学 (埼玉県深谷第 1 高校60名)、学生 2 名
- ・ 19 日 (水)
 - 開 館
- ・ 20 日 (木)
 - 一般 1 名 (福生市)
- ・ 24 日 (月)
 - 一般 1 名 (上尾市)
- ・ 26 日 (水)
 - 開 館

・27日(木)

一般3名(鎌倉市・佐野市)、学生1名

・31日(月)

開館



視察・国分寺市教育委員会
(2002. 8. 9)



オープンキャンパス
(2002. 11. 3)



第1回運営委員会
(2002. 6. 3)

V. 寄贈図書目録(2003.4~2003.3)

<青森県>

浪岡町教育委員会

- ・平成12年度 浪岡町文化財紀要Ⅰ
- ・平成13年度 浪岡町文化財紀要Ⅱ

<福島県>

福島県文化財センター白河館

- ・まほろん通信 VOL.5, 6
- ・まほろんてんじの本
- ・弘法山のよこあなー古代ガラスと象形の世界ー

<栃木県>

作新学院高等部社会研究部

- ・日光杉並木の研究

<群馬県>

笠懸野岩宿文化資料館

- ・パンフレット

<埼玉県>

朝霞市博物館

- ・朝霞市博物館要覧
 - 第1号 平成8・9年度
 - 第2号 平成10年・11年度
 - 第3号 平成12年度・13年度
- ・朝霞市博物館研究紀要 第1・2・3・4・5号
- ・朝霞市博物館資料利用目録Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
- ・朝霞市博物館館有資料目録Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
- ・朝霞市博物館活用授業実践事例集Ⅰ
- ・朝霞市博物館ー総合案内ー
- ・特定展 埼玉の化石展
- ・ギャラリー展 水辺の生き物
- ・ギャラリー展 博物館の草花

- ・第1回企画展 あさかの弥生文化ー鉄斧とその時代ー
 - ・第2回企画展 獅子の芸能と信仰ー厄除・子育て・五穀豊穰ー
 - ・第4回企画展 極楽往生を願って
 - ・第5回企画展 盃のある風景ー盃・徳利・酒づくりー
 - ・第6回企画展 川と人々のくらし
 - ・第7回企画展 祈り・願い・想いー朝霞の絵馬ー
 - ・第8回企画展 なつかしのおもちゃ
 - ・第9回企画展 旅ー道中日記の世界ー
 - ・第10回企画展 富士と桜ー富士美術館コレクションー
 - ・朝霞市市制施行35周年記念・朝霞市博物館開館5周年記念
 - ・第11回企画展 縄文土器の世界
 - ・風と浪漫の情景 池田幹雄展
 - ・ちいさな美術館Ⅵ かたどられたもようー着物染付型紙に見る伝統美ー
 - ・竹下幸子作品 ちいさな美術館Ⅹ 尾崎豊の肖像展
 - ・ちいさな美術館12 縄文土器の美
 - ・ちいさな美術館15多彩なる染色の世界ー原梢美展ー
 - ・ちいさな美術館16 遊覧飛行あさかⅡ昭和30年代と平成7年
 - ・朝霞市博物館調査報告書
 - 第1集 水車・伸銅・にんじん
 - 第2集 厚川家所蔵銭貨調査報告書 2部
- #### 入間市博物館
- ・アリット・フェスタ2002 特別展 セピア色の点描ー写真が語るあの頃の入間ー
- #### 岩槻市立郷土資料館
- ・企画展 岩槻の中近世遺跡ー岩槻城とその時代ー
- #### 大井町立郷土資料館

・企画展 石にこめた願い～時の果てへの旅～
大里村教育委員会

- ・復刻版 大里村のかたり草
- ・埼玉県大里郡
- ・大里村南部遺跡群 I
- ・大里村南部土地画整理事業に伴う発掘調査報告書 第一冊
- ・阿諏訪野東遺跡・東山遺跡 I～III区・楓山西遺跡・楓山北遺跡

岡部町教育委員会

- ・古代の役所
ー武蔵国榛沢郡家の発掘調査からー
- ・岡部町遺跡調査会埋蔵文化調査報告書第9集 熊野遺跡 I
- ・埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財調査報告書第4集 中宿遺跡III

春日部市郷土資料館

- ・第25回特別展
太古の声が聞こえる～春日部と近隣の出土品展～

埼玉県立博物館

- ・特別展 開設四百年 中山道ー武州往来ー
- ・平成14年度 博物館要覧
- ・二〇〇二 彩の国埼玉 発掘調査速報展

埼玉県立自然史博物館

- ・埼玉自然史博物館の概要 平成14年度
- ・「日本地質学発祥の地」長瀬とその周辺の地質
- ・ちちぶの博物館
- ・イベントインホメーション
- ・自然史博物館
- ・自然観察ガイド①長瀬岩だたみコース
- ・自然観察ガイド②長瀬宝登山コース
- ・みんなの自然史
- ・自然史だより46
- ・自然史百科77 シダ植物ー花の咲かない美しい植物ー
- ・自然史百科78 日本列島最古のサンゴ化石

・自然史百科79 クモノスダとそのなかまチャセンシダ属のシダ植物ー

- ・自然史百科80 生痕化石 ー地質時代の動物が残した生活のあとー
- ・「自然史ふれあいトーク」と「土曜おもしろ博物館」(チラシ) 7, 8月号

庄和町教育委員会

- ・庄和町文化財調査報告 第7集
- ・庄和町遺跡調査会報告書 第9集
- ・庄和町遺跡調査報告書 第10集

高井遺跡発掘調査会

- ・高井東遺跡 ー第3次発掘調査報告書ー

花園町教育委員会

花園町遺跡調査会発掘調査報告書

- ・第1集 花園町№50遺跡
- ・第3集 台耕地遺跡ー第2次調査ー
- ・第4集 上南原下遺跡ー第3次調査ー
- ・第5集 宮林原地遺跡
- ・第6集 大通寺内遺跡
- ・花園町教育委員会文化財調査報告1
- ・花園町教育委員会文化財調査報告2 上南原下遺跡・下南原東遺跡
- ・橋屋遺跡・花園町郷土史料 第1集 大里郡教育会編 花園村郷土誌
- ・花園町郷土史料 第2集 諸家文書目録1

深谷市教育委員会

- ・平成14年10月13日現地説明会資料 幡羅遺跡(第3次調査)

富士見市立水子貝塚資料館

- ・富士見市の遺跡
- ・史跡 水子貝塚
- ・縄文海進と貝塚 ～富士見市と周辺の貝塚～

富士見市立資料館

- ・平成12年度 富士見市立資料館要覧

本庄市立歴史民俗資料館

- ・本庄市立歴史民俗資料館概要

八千代市立郷土博物館

- ・平成14年度 第2回企画展

八千代の近代農業

寄居町教育委員会

寄居町文化財調査報告

- ・第5集 稲荷窪遺跡
- ・第6集 南大塚遺跡
- ・第8集 むじな塚遺跡群
- ・第9集 庚申塚遺跡群
- ・第10集 大正寺遺跡
- ・第11集 東国寺東・増善寺遺跡
- ・第12集 町内遺跡1
- ・第13集 町内遺跡2
- ・第14集 町内遺跡3
- ・第15集 町内遺跡4
- ・第16集 用土北沢遺跡
- ・第17集 町内遺跡5
- ・第18集 県指定天然記念物
- ・第19集 用土北沢遺跡(2次)・用土台遺跡・用土柿林遺跡
- ・第20集 町内遺跡6
- ・第21集 町内遺跡7
- ・第22集 用土高城遺跡
用土北沢遺跡(4次)
- ・第23集 用土北沢遺跡(3次)
- ・第24集 町内遺跡8

寄居町遺跡調査会報告

- ・第1集 中小前田1遺跡
- ・第2集 薬師台遺跡・大正寺南遺跡
- ・第3集 東伴場地遺跡(第5次)
- ・第4集 普光寺東遺跡(第2・3次)
- ・第5集 大町遺跡
- ・第6集 伊勢原遺跡
- ・第7集 甘粕原遺跡
- ・第8集 用土前峯遺跡(第2・3次)
- ・第9集 未野元宿遺跡
- ・第10集 むじな塚遺跡(第4次)
- ・第11集 中小前田1遺跡(第2次)

- ・第12集 露梨子遺跡(第2次)
- ・第13集 灰田原遺跡
- ・第14集 中小前田2遺跡(第4・5次)
小前田3号墳
- ・第15集 田代遺跡
- ・第16集 むじな塚遺跡(第5次)
- ・第17集 沼下遺跡(第3次)
- ・第18集 用土前峯遺跡(第1次)
- ・第19集 未野窯跡第8支群2
- ・第20集 中山遺跡(第1・2次)
- ・第21集 南大塚遺跡(第3次)
- ・第22集 中小前田遺跡(第9次)

<東京都>

三鷹市教育委員会

三鷹市埋蔵文化財調査報告

- ・第23集天文台構内遺跡Ⅱ 東京都三鷹市大沢
天文台構内遺跡発掘調査報告書
- ・第24集 下原B遺跡Ⅰ 東京都三鷹市大沢下
原B遺跡発掘調査報告書

駒澤大学・駒澤短期大学

- ・駒澤大学禅文化歴史博物館
- ・駒澤大学禅文化歴史博物館 開館式典・祝賀会

明治大学博物館事務室

- ・明治大学博物館年報 2000年度
- ・明治大学博物館図書目録第4号 2002年度版
- ・平成13年度文部科学省委「楽しむ博物館づくり事業」実施報告書
- 21世紀をひらく歴史と文化の再発見～明治大学刑事博物館資料の世界～
- ・「明治大学刑事博物館資料」第16集
—『刑事博物館図録』上巻 研究篇—
- 「明治大学刑事博物館目録」第61号—資料目録等の目録1—東京篇
- ・「明治大学刑事博物館目録」第62号—所蔵資料解説・出版物目録—

- ・第31回博物館公開講座 考古学ゼミナール
地域の考古学PARTV

お札と切手の博物館

- ・特別企画展 ユーロ紙幣

たばこと塩の博物館

- ・夏休み塩の学習室 2002塩の旅

<神奈川県>

横浜市歴史博物館

- ・大塚・歳勝土遺跡公園
- ・企画展たのしい考古学
- ・屋根裏の博物館

大磯町郷土資料館

- ・建物概要

<岐阜県>

飛騨・世界生活文化センター

- ・七宝充滿－万国博覧会と明治の匠－

<京都府>

花園大学

京の乱世

<大阪府>

大阪芸術大学

- ・大阪芸術大学博物館(パンフレット)
- ・大阪芸術大学博物館 開設記念所蔵品展

—— 加藤邦雄氏寄贈 ——

加藤邦雄氏（昭和37（1962）年、文学部史学科卒、同43（1968）年、大学院文学研究科史学専攻修了）より下記の文献の寄贈を頂いた。加藤氏は、本学科ネパール仏跡調査団の団員として発掘調査に参加され、インド各地の仏跡を調査されたが、その折に収集したインド考古学の文献を主とする図書である。

- ・ *Archaeological Survey of India, 1961, The Story of Indian Archaeology 1784-1947*
- ・ A. Cunningham, 1963, *Coins of Ancient India*
- ・ A. Cunningham, 1963, *The Ancient Geography of India The Buddhist Period*
- ・ Archaeological Survey of India, 1964, *Archaeological Remains Monuments And Museums Part1・2*
- ・ A. Cunningham, 1966, *Bhilsa Topes a Buddhist Monument of Central India*
- ・ A. L. Basham, 1967, *The Wonder That was India*

- ・ *Anthropological Collections in the Museums of India, 1967*
- ・ *Archaeology in India, 1967*
- ・ A.Fuhrer, 1969, *The monumental Antiquities And Inscription in The N. W. provinces and Oudh*
- ・ Alexr Rea, 1969, *South Indian Buddhist Antiquities*
- ・ *Archaeological Survey of India Report, III ~X XIV, 1966-1969, 1969*
- ・ A. Cunningham, 1970, *Coin of Alexanders Successors in the East*
- ・ *Ancient Nepal 1(1967)-11(1970)*

- Archaeological Survey of India, 1902- 1903, 1970
- A. K. Srivastava, *Indo Greek Coins in the State Museum Luknow*
- B. Sahni, 1945, *The Technique of Casting Coins in Ancient India*
- B. B. Lal, 1964, *Indian Archaeology Since Independence*
- Bridget and Raymond Allchin, 1968, *The Birth of Indian Civilization*
- *Bulletin of Museum and Archaeology in U. P* No. 1 (1968)-No. 6 (1970)
- B. P. Sinha *Potteries in Ancient India* 1969
- *Bronze Images in Patna Museum*
- B. Chattopadhyay, *The Age of the Kushanas*
- *Catalogue of Exhibition of Buddhist Art, 1956*
- W. M. Hurley and N. Wagner, 1972, *Ceramic Analysis*
- *Catalogue of Buddhist Sculptures in Patna Museum, 1957*
- C. R. Singhal, 1958, *Bibliography of Indian Coins part 2*
- C. R. Singhal, P. L. Gupta, 1965, *Bibliography of Indian Coins part 2 1952-1960*
- C. H. Biddulph, 1968, *Coins of the Cholas*
- C. Sivaramamurti, 1970, *Indian Painting*
- Dale R. Croes, 1976, *Northwest Coast Water-Saturated sites*
- D. Mitra, 1969, *Memories of the Archaeological Survey of India a Submerged Temple-Site in West Bengal*
- D. M. Stothers, 1977, *The princess point complex*
- Director General of Archaeology in India, *Ancient India 1(1946)-21(1965) , 1946-1965*
- D.W.Clark, 1974, *Archaeological collections from Norutak Lake, Alaska*
- D. C. Sircar, *Inscriptions of Asoka*
- D. C. Sircar, 1968, *Studies in Indian Coins*
- D. P. Agrawal, 1969, *The Copperbronze Age in India*
- Ellora Caves Album
- E. J. Rapson, 1969, *Indian Coins*
- *Elephanta Guide*
- *Ellora Ajanta Guide*
- G. R. Sharma, 1960, *The Excavations at Kausambi 1957-59*
- G. R. Sharma, 1969, *Excavations at Kausambi 1949-50*
- G. R. Willey. 1966. *An Introduction to American Archaeology*
- *Gandhara-Sculptures in the State Museum Lucknow*
- Herbert Kuhn, 1958, *On The Track Of Pre-historic Man*
- H. D. Sankalia, 1962, *Indian Archaeology Today*
- H. D. Sankalia, *An Introduction to Archaeology*
- *Hindu Civilization*
- *International Conference on Asian Archaeology Summaries of papers, 1961*
- *Indian Museum General Guide Book*
- Jal Cooper, F. R. G. S. 1967, *A Priced Catalogue of "Post-Independence "Indian Stamps (1947-1966)*
- J. Brown, 1917, *Catalogue of Prehistoric Antiquities in the Indian museum*
- J. Marshall, 1955, *A Guide to Sanchi*
- J. E. Kidder, 1966, *Japan Before Buddhism*
- J. Filliozat, 1967, *Studies in Asokan Inscriptions*

- Jas Burgess, 1970, *The Buddhist Stupas of Amaravati And Jaggayyapeta*
- K. P. Jayaswal, 1959, *Report on Kumrahar Excavation 1951-55*
- K. Deva and V. mishra, 1961, *Vaisali Excavations*
- K. R. Srinivasan, 1964, *Cave Temples of the Pallavas*
- K. Deva, 1969, *Temples of North India*
- *Khajuraho*
- Masashi Chikamori and Hiroaki Takasugi, 1985, *Archaeology On Rennell Island*
- M. C. Burkitt, 1963, *The Old Stone Age*
- M. S. Nagaraja and K. C. Malhotra, 1965, *The Stone Age Hill Dwellers of Tekkalakota*
- N. Bose and D. Sen, 1948, *Excavations in Mayurbhanj*
- N. R. Banerjee, 1965, *The Iron Age in India*
- N. C. Chaudhuri, 1969, *The Autobiography of An Unknown Indian*
- N. Nath and J. P. Saxena, 1966, *Archaeological Museum Sanchi*
- N. P. Joshi, *Mathura Sculptures Archaeological Museum Mathura*
- *Nalanda*
- *National Museum New Delhi No1, 2*
- P. M. Sarup Vats, 1952, *Memoirs of the Archaeological Survey of India The Gupta Temple at Deogarh*
- *Patna Museum Catalogue of Antiquities 1965*
- P. Brown, 1965, *Indian Architecture Buddhist and Hindu Period*
- P. C. Mukherji, 1969, *Antiquities of Kapilavastu Tarai of Nepal*
- P. L. Gupta, 1969, *Coins*
- P. L. Gupta, 1969, *Coin-Hoards from Gujarat State*
- P. Gardner, 1971, *The coins*
- H. D. Sankalia and S. B. Deo *Report on the Excavations at Nasik and Jorwe 1950-51, 1955*
- R. N. Mehta, 1955, *Excavations at Timbarva 1953*
- R. V. Joshi, 1955, *Pleistocene Studies in the Malaprabha Basin*
- R. S. Gupte and B. D. Mahajan, 1967, *Ajanta And Ellora*
- R. Thapar, *A History of India*
- S. C. Kala, 1950, *Terracotta Figurines from Kousanbi*
- Sir. M. Wheeler, 1959, *Early India and Pakistan*
- S. B. Deo Archaeological, 1964, *Investigations in the Nepal Tarai 1964*
- S. B. Deo, 1965, *Archaeological Excavations in Kathmandu*
- Sir. M. Wheeler, 1966, *Civilizations of the Indus Valley and Beyond*
- S. G. Dawne, 1970, *Ellora and Environs*
- S. K. Maity, 1970, *Early Indian Coins of Currency System*
- *Select Buddhist Sculptures in Patna Museum*
- S. Radhakrishnan, 1958, *Archaeology In India*
- *Sravarsti*
- S. V. Sohoni, *Index to Articles 1915-1961*
- *Terracotta Figurines in Patna Museum*
- *The Excavations at Pandu Rajar Dhibi*
- *The Excavations at Maheshwar and Navdatoli 1952-53, 1958*
- Shri S. V. Sohoni *The Indian Numismatic Chronicle(1960-1969)*

- ・ W. Watsoson, 1966, *China*
- ・ W. B. Workman, 1978, Prehistory of the Aishihik-Kluane Area, Southw out Yukon Territory
- ・ 天沼俊一『増補訂正印度仏塔巡礼記』
上・下 昭和19年
- ・ ロミラ=ターパル著 寺島 昇他訳
『インド史』1・2 昭和45, 47年
- ・ 上野 照夫『インドの美術』 昭和39年
- ・ 鹿島平和研究所編『インドヒマラヤ諸国』
昭和44年
- ・ 佐々木教悟他『仏教史概説 インド篇』 昭和41年
- ・ V. Prakash, 1968, *Coinage of South India*
- ・ *Tibet is my Country* T. Norbu, Dalai Lama, H. Harrer, 1969
- ・ V. D. Mahajan, 1970, *Ancient India*
- ・ 佐藤圭四郎『古代インド』 昭和43年
- ・ 中村 元『印度古代史』上・下 昭和38年
- ・ 中村 元『ゴータマ・ブッタ釈尊の生涯』
昭和44年
- ・ 米倉 二郎『インドの農民生活』
昭和44年
- ・ コウサンビー 山崎利男訳『インド古代史』
昭和41年
- ・ 山本達郎編『インド史』 昭和35年

立正大學博物館

沐浴

立正大学博物館は、大佛創設130周年記念として、平成五年度（昭和二十九年）万石1700、同日大熊谷キャンパス内に開設された。2002年4月1日に開館記念として校内でオープンした。本館の前身は、東京物品店（現・東武百貨店）に開設された考古学標本室（後に考古学資料室）と1978年に明治館キャンパスに開設された考古学標別室であるが、創立以来、学内の各学部・学科で収集されてきた諸資（史）料を一括管理し、公開することとを目的として「立正大学博物館」と改称された。その趣旨は、「植物・民俗・産業・自然に関する学術資料」（「収集・保存」）と主として「教育、免状に寄与する」とされている。また、社会に公開し「これを調べる人々」、大佛付蔵博物館としての役割が示されている。

2. 展示

開顔にあたり展示された資料の大半は次のとおりである。(1) ネパール、ティラウラコットの遺跡出土品。1967年～77年にかけて、立正大学ネパール文化研究所によって発掘された城塞遺跡「釈迦出家・カピルボット」の最初より完成までに出た土に北方系青銅土器をはじめ、マウリヤ・クシャートラ時代のチャクラム、ライオン像など。(2) サハリン(樺太)出土品。久松義典博士(立正大学名誉教授)が1930年に発見した土器、石刀、骨角製武器。『吉野古コレクション』吉田格氏(立正大学)寄贈の旧有書、縄文時代の資料と伊藤兼三蒐集品(戦後5年の箱書)。旧石器時代の石器は熊ノ本郷・越々谷村(東京都国分寺市)などからの土器、縄文時代では、早期の花巻式部遺跡(茨城)、城之宮遺跡(千葉)、新田山遺跡(神奈川県)など、弥生時代では、新田山遺跡(千葉県)

坂詰 秀二
(立正大学博物館長)

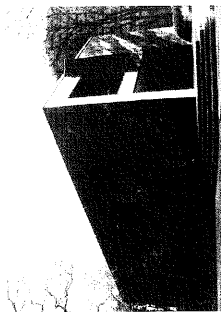


图1 立正大学博物館全景

器・石器・骨角器などがあり、特に称名寺式の古墳が重要。(古)撫石蔵古墳群(古墳群)の発見は、古墳研究会(日本古墳研究会)の調査結果、具・仏像など。スリランカ・ミャンマー・タイ・中国・朝鮮半島・日本の銅と鉄、タタラの銅、鉄、朝鮮半島の金貨、日本前期・前期の銅貨、武定7年製の金銅製の100余点。アジアの「鏡」(資料の複製は、Oriental Bell Museum)とも言える。

3. 活動

公開講座の列品書庫のほか、展示資料に関連したシンポジウムの開催が予定されている。出版関係では、同館に際して『立正大学博物館要説』（B5、32頁）が作成配布されたが、今後、『要覧』（A4、年刊）と『立正大学博物館だより』（A4、不定期）が刊行されることになっている。



图2 第1展示窗

また、すでに立正大学が出版した『吉田格コレクション』(1990)、『熊石庵コレクション』(1990)、『熊石庵図録』I・II (2000, 2001)の展開が描かれている。



图 3 第 2 层示意图

ロゲンランブ使用、防犯・防災設備は各室熱セ
ンサー取付、ITV設備としてCCDカメラ4台、
空調は空冷式である。

4. 教育と研究

大学付属博物館として博物館学講座を設けることは、博物館の教育を推進するためには、国内内外の連携分野に對しても広く活用していただく方向付けを要していく必要がある。一方、立正大学地球環境科学研究所をはじめとす大学付属研究所と協力して、立正大学の研究と教育の成果を公開する場としての機能を実現したいと願っている。

5. 施設

鉄筋コンクリート造、2階建、面積は376.8㎡。1階に第1展示室、事務室、収蔵庫、トイレなど、2階に第2展示室、館長室、資料室、電気室などが配られている。ほかに別棟として、資料収蔵庫が付置されている。展示室の照明はハ

6. 利用案内

所在地：〒360-0161
埼玉県熊谷市方吉1700
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170

立正大学博物館年報 1

(平成14〈2002〉年度)

平成15 (2003) 年3月31日 発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL. 048-536-6150 FAX. 048-536-6170

e-mail:museum@ris.ac.jp

<http://www2.ris.ac.jp/~museum/museum/main1.html>

(印刷 東ブリ)